

読者投稿

あしたの風

wind for tomorrow

毎月、第2、4週に掲載。地域の課題や出来事、まちの話題などのほか、毎月決まったテーマでの投稿や、身近な題材で自由に書いていただくエッセーを紹介しします。

★4月のテーマは「ファミリー」。

締め切りは、4月15日(火)。出会いや誕生の春。新しい家族、グループ…。「ファミリー」にまつわる話をお寄せください。※今年「戦後80年」。関連の投稿を随時掲載しします。原稿をお待ちしています。

テーマ投稿「ファミリー」

8年ほど前から、町内の方々に誘われて市中心部の青葉公園でウォーキングをしている。広さは札幌ドームの3倍余りの102.3ヘクタール。コロナ禍の時期を除いて週2回大雨や吹雪の日以外約1時間半かけて歩く。歩数はおよそ8千歩だ。楽しみなのは季節の花との出会いだ。かれんな花の名を仲間の先輩に教わる。今頃ならナニワズやエゾエンゴサク、ニリンソウなど。50年に一度しか咲かないといわれるササの花を見た時には、幸せ

先日、久しぶりに近くの回転ずしに行った。小一時間ほど、好みのネタで食事を楽しんだ。勘定を頼むと、50代の女性店員が「お客さん、こちらの機械にお金を入れてください」とセルフレジの前に案内してくれた。「あつ横に入れるんですね」。お釣りがすぐ出てきて小銭を探す暇もない。「慣れましたか」と尋ねると、「お客さんとの会話がなくなりまして」と苦笑い。確かにそうでしょう。今や、飲食店ではロボットが料理を運び、

歩こう会

イエローキャットさん(72歳・主婦)＝千歳市

な気持ちになった。数年前の7月初めごろだったろうか。1、2月はオジロワシ、リスは通年で見かける。6、8月はシカやクマが出没。クマには遭遇したくない。すれ違う人たちとあいさつを交わす。四阿(あずまや)での休憩がお決まりで時にはコヒータイムを楽しむ。残念なのは、自然豊かなこの公園を訪れる人が少ないように思えることだ。四季の変化を肌で感じながら、自然とともにみんな元気に歩かないかい!?

恋しい「ひととき」

まだ呑める幸齢者さん(89歳・団体役員)＝恵庭市

ロボットをどうやって調理場に返すか、こちらが気に使う。おまけに、会計を自ら機械で精算し、「あらがとう」と声をかけることもなく帰る。何だか寂しい後姿だ。デジタル時代を迎え、これに慣れてしまうと、何もかも「機械相手」が当たり前。店内でのやり取りもなく、引き揚げるのが日常となる。すし屋では大将と会話しながら、職人ならではのシャリの硬さが適度な握りで、ちびちびと酒を呑(の)む「ひととき」が恋しい。

戦後80年

投稿のきまり

原稿には手を加えさせていただくことがあります。一般、テーマ投稿、エッセーとも文章は400字程度で、未発表の原稿に限りです。年齢制限はありません。ペンネームは使用可。受け付けは郵便、Eメール、FAXで。いずれも郵便番号、住所、氏名、年齢、職業、電話番号の明記を。採否のお問い合わせはご遠慮ください。採用された方には薄謝をお届けします。

父は陸上自衛隊で働いている。小中学生の頃、親が自衛官という同級生が多かった。2011年の東日本大震災当時、父親の派遣先や活動内容について教室でよく話したものだ。このため、「自衛隊は災害から国民を助ける仕事」というイメージを持つようになった。高校生になり、本を読むなどして「わが国の平和と安全を守るのも任務」と知った。それまで祖父から曾祖父が太平洋戦争で、ある島に出征したと聞いたことはあった。た

だ、戦争については学校で学んだ歴史上の話という認識だった。その後、父の仕事のこともあり、日本や世界の平和について考える機会が増えた。新聞やテレビ、ネットで調べるなどしている。世界に目を向ければ、ウクライナやパレスチナのガザ地区での戦闘は終結が見通せない。戦後80年。平穏に暮らせることに感謝している。先人の苦勞を無にしないためにも、私たち若者世代も何ができるか考えたいと思う。

坪井 茉莉香さん(24歳・イラストレーター)＝千歳市

ため息をつく私に、「実家を背負う運命だね」と夫が言う。20代半ばで転勤族と結婚。札幌の実家は、長男の責任で東京の兄とかしてくるだろうと、道外でのんきに暮らしていた。

が、思惑は外れる。両親は商売をしていた。父が60代後半で亡くなり、母が一人で奮闘していたが無理が見え始める。兄妹はやめるべきとすげない。やむなく、たまたま夫が札幌に転職し、帰郷したのを機に私が継

幸せな運命

日日は好日さん(60歳・主婦)＝札幌市

いだ。子育て真っただ中の40歳だった。店の仕事は性に合い、天職と思った。十数年たった頃、片付けも私の苦勞を思い数年悩んだ末、店をたたんだ。母は80代後半になると手助けが必要な場面が増えていく。われ関せずの姿勢を変えない兄妹に、介護も引き受けると覚悟する。「きょううだいは他人の始まり」というが、身をもって知る。これが私の運命なら親孝行の機会をもらえて幸せと思おう。

宛先

郵便

〒066-0073
千歳市北斗4丁目13-20
株式会社メディアコム
ちゃんと編集部「あしたの風」宛

Eメール

ashitanokaze@chanto.biz

FAX

0123-27-4911

タウンニュース掲載
スケジュールの変更について
印刷会社のゴールデンウィーク期間にともない、**申し込み締め切りを変更**します。

4月25日号の締め切りは 4月14日(月) 16:00 まで	5月2日号の締め切りは 4月18日(金) 9:00 まで	5月9日号の締め切りは 4月21日(月) 9:00 まで
--	--	--

翌週5月16日号より通常どおりの締め切りとなります。

ちとせくうこうのはじまり

その五

喜んだ新聞社の人は、「それは、ありがたい。それでは、旅行会の日に、千歳の空に飛行機を飛ばして、歓迎ピラをまくことにしましょう。」と、提案しました。

飛行機を見たことがなかった村の人は、「それなら、ぜひ、飛行機を近くで見たいものだ。着陸して見せてほしい。」と、頼みましたが、「それは、飛行場がないので、無理です。」と、断られてしまいました。

作・画／千歳航空協会 企画・監修／千歳市空港開港100年記念事業実行委員会

読める? 北海道の地名

おだいとう

尾岱沼

(北海道野付郡別海町)

おおよそこの辺り

わたしの「生活史」

まちライブラリー MACHI LIBRARY

#25 郷愁誘う別れ

祁答院 義邦(81歳・無職)＝北広島市

出会いと別れの季節。舞台は駅か。道東の雪の原野の無人駅。どこからか高校生とおぼしき学生服姿の10人近い男女がわいて出て車両に乗り込む。昨年暮れにテレビで見た。恋が芽生えた若者がいても不思議はない。卒業すると、進学や就職で別れたり、散り散りになっていく。プラットホームが日本一多い東京駅は、別れと出会いの交差点。かつて新婚旅行に出発する若いカップルの見送り、若い弾んだ笑い声がホームにあふれたものだ。カラオケ好きにとつて空港での別れの曲といえ、夜間飛行がない時代に幻の最終便といわれた、フランク永井の「羽田発7時50分(1958年)」だろう。

歌うのはいいが、飛行機は窓が開かず、いきなり速度を上げられては泣くに泣けない。やはり、窓から手を振り、声を限りに叫び合う別れの汽車や電車が郷愁を誘う。今は莫大な費用がかかるが、宇宙へ旅立つ「音速を超える別れ」。なんて時代が来るかもしれない。

まちライブラリー@ちとせ 登録料500円で、どの地域に住む方も会員登録が可能。2週間3冊の本の貸出や、館内でのイベント開催、Wi-Fiなどの設備を利用できます。
千歳市末広6-3 アルファ千歳ビル1階 【営業時間】10:00～20:00(火曜定休) 【問合せ】TEL0123-21-8530